



TITLE:

資本論の始點と終點との辯證法的統一

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. 資本論の始點と終點との辯證法的統一. 經濟論叢 1927, 25(4): 21-37

ISSUE DATE:

1927-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128599>

RIGHT:

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（每月一回一日發行）
經濟論叢 第二十五卷 第四號

田島博士
還曆祝賀記念
論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和二年十月一日發行

經濟論叢

第二十五卷第四號

(通卷第四百十八號。禁轉載)

資本論の始點と終點との辯證法的統一

河 上 肇

Womit muss der Anfang der Wissenschaft gemacht werden? これはヘーゲルが論理學第一篇の冒頭に掲げた問題である。この問題をマルクスが經濟學に關し如何に解決したかを、具體的に資本論について明かにすることが、本論の目的である。

『哲學の端初は媒介されたものか又は直接的なものでなければならぬ、ところでそれは一方のものでも他方のものでもあり得ないといふことを指示するのは容易である』。何故なれば、媒介されたものであれば、それは他に依存することになり、直接的なものであれば、それは論證を欠ぐであらうから。『哲學において端初を見出すことの困難』は、かゝるディレンマを解決することの困難である。

マルクスは資本論において斯かるディレンマを如何に解決してゐるか?

循環の完全なる承認と循環からの完全なる脱出、かゝる對立物を辯證法的に統一することが、唯物辯證法の一つの特徴である、と私には思はれる。それはディレンマの承認のもとにディレン

マを解決することにより、これを辯證法的に止揚するものである。資本論の始點は終點から出てをり、またその終點は始點に基づいてゐるがゆえに、そこには一個の循環が描かれてゐるが、しかしそれは螺旋形を成すものとして、思惟の循環から脱出してゐる。私は茲にそのことを明かにするであらう。

『吾々の研究は商品の分析をもつて始まる』とマルクス自身が言つてゐるやうに、商品は、分析さるゝものとしては、最初の・最も抽象的な・最も簡單な・最も普遍的な範疇として、資本論の冒頭に現はれてゐる。すなはち商品交換または商品は、資本家的社會または資本家的社會の富を研究の對象とせる・資本論の端初である。資本論は、かゝる最も抽象的な範疇から出發して、思惟の進行につれ次第により具體的な範疇に向上し、最後に、思惟の運動の終結として、資本家的社會または資本家的社會の富といへる具體物を精神的に再生産せんとするものである。簡單にいへば、資本論は、商品交換または商品をもつてその始點となし、資本家的社會または資本家的社會の富をもつてその終點となしてゐる。

しかるに、私の見るところによれば、かゝる思惟の全運動において、始點は終點を前提とすると同時に、終點はまた始點を前提としてゐる。ところで、ただ終點が始點を前提とするといふだ

けなれば、それは思惟の進行において本來當然のことであるが、それと逆に、しかもそれと同時に、始點が終點を前提としてゐるといふことは、一の循環であり、かくては論證が *endlos* なものとなるかに見ゆる。しからは、資本論は如何にして、かくの如く始點を終點に依存せしめ、また終點を始點に依存せしめつゝ、そこに横たはれる矛盾を合理的に統一してゐるか？

それを明かならしむるためには、始點は如何なる意味において終點に依存してゐるかを、先づ明かにせねばならぬ。

資本論の冒頭に現はれてゐる商品(資本論の始點)は、何がゆえに、資本家的社會または資本家的社會の富(資本論の終點)に依存してゐるといふか？ それは、その商品が、資本家的社會の富の細胞形態としての商品だからである。周知の如く、資本論の劈頭は、*Der Reichtum der Gesellschaften, in welchen kapitalistische Produktionsweise herrscht, erscheint als eine „ungeheure Warensammlung,“ die einzelne Ware als seine Elementarform.* (資本家的な生産の仕方の支配してゐる社會の富は、一個の「途方もない、龐大な商品の集大成」として、個々の商品は、その「資本家的な生産の仕方の支配してゐる社會の富の」原基たる形態として、現はれる)なる言葉で始められて居り、なほそこでは、それに引續き、『だから吾々の研究は商品の分析を以て始まる』と書かれてゐる。

すなはち、そこで分析さるゝ商品は、資本家的社會の富の *Elementarform* としての商品であり、それゆえにそれは、資本家的社會または資本家的社會の富を離れては——これを前提とするにあらざれば——存在し得ざるものである。この場合、個々の商品は孤立して存在してゐるのではない、それは他と、全體と、『一個の龐大な商品の集大成』として現はれてゐる資本家的社會全體の富と、結びつき、みづからをそれに媒介することによつて、かゝる資本家的社會の富の *Elementarform* としての普遍性を具へてゐる。かゝる普遍性における商品——商品形態 (*Warenform*)——は、*sehr inhaltslos und einfach* (極めて無内容かつ簡單)¹⁾ なものであるが、しかしそれは最も豊富なる内容に充ち／＼た・最も複雑な・資本家的社會全體の富の一面であるがゆえに、その無内容は最も豊富なる内容を背景とせる無内容であり、その簡單性は最も複雑な諸規定を潜在せしめてゐるものとしての簡單性である。それは、形式論理の抽象的普遍性に對立するものとしての、具體的普遍性を具へてゐる。

資本論は、かゝる意味においての最も普遍的な・最も抽象的な・最も簡單な範疇としての商品の分析をもつて、その端初とする。だから資本論には、最初から資本家的社會または資本家的社會の富が前提されてゐる。しかし研究は、この複雑極まれる對象の一つの方面——最も基礎的ではあるが、しかし最も簡單なる方面としての、商品交換または商品(富の商品形態)——の分析をも

1) Kapital, I, Vorwort, Volksausgabe, S.XXXVI.

つて始まる。すなはち端初は、最も複雑なもの、一方面または一契機としての最も簡單な範疇である。

それゆゑ、思惟の道程における Vorwärtsschreiten (前進) は、ヘーゲルのいふ如く、或る意味において Rückwärtsgelien (復歸) である。吾々は最も抽象的なものから出發して、次第により具體的なものに進み、最後に、『多くの諸規定の總括』『多様性の統一』としての具體物において、研究の對象を精神的に再生産するのであるが、しかしその出發點となつたものが到着點に横たはる具體物の一面であり、従つて前者は後者に依存して居り、後者から派生したものに過ぎぬとするならば、思惟における前進は、*kein* ein Rückgang in den Grund, zu dem Ursprünglichen und Wahrhaften..., von dem das, womit der Anfang gemacht wurde, abhängt und in der Tat hervorgebracht wird (本源的なものへの復歸) に外ならぬのである。Dies Letzte, der Grund, ist denn auch dasjenige, aus welchem das Erste hervorgeht, das zuerst als Unmittelbares auftrat. 最後のものは、最初のものが、それから出て來たものである。かくて吾々の思惟は、結局、一の循環を描くことになる。Das Wesentliche für die Wissenschaft ist dass das Ganze derselben ein Kreislauf in sich selbst ist, worin das Erste auch das Letzte und das Letzte auch das Erste wird. 『科學の全體はそれ自身において一つの循環であり、そこでは最初のものがまた最後のも

のとなり、最後のものがまた最初のものとなる』。

かゝる循環は形式論理における循環論の循環と異なる。吾々は進んで之を明かにするであらう。多くの學者は、形式論理による循環論にさへ甘んぜんとしてゐる。高田保馬博士は嘗て本誌に掲載された『效用、價值及び價格』のうちに、次の如く述べて居られる。『この説明の仕方は究極、循環的説明に終らざるや……私はいかにして次の如く考へる。よし説明が循環的であるにしても、もし他に説明の仕方がないとするなれば、それは已むを得ざる循環的説明である。有限なる知性の能力を以てしては循環的説明も已むを得ざる時があり、已むを得ざる時にはこれを以て満足しなければならぬ。それはなさざるに勝る、何物かを教ふる知識である、云々』⁴⁾だが私はいかに循環的説明に満足し得ざるものであり、かつ唯物辯證法はかゝる循環からの脱出の道を吾々に指示すると考ふるものである。

鶏は何から生まれたかとの問に對し、それは卵から生まれたと答へ、しからは卵は何から生まれたかと反問さるゝとき、それは鶏から生まれたと答ふことは、『何物かを教ふる知識である』かも知れないが、吾々の科學的研究が斯かる知識に満足し得ないことは、恐らく多言を要せぬであらう。唯物辯證法はかゝる循環から脱出すべき科學的方法を吾々に指示する。鶏と卵とは一個

4) 『經濟論叢』第23卷16頁

の統一物に含まる、對立物である。卵は鶏から生まれるがゆえに、鶏を離れて、鶏を前提せずしては、卵の存在はあり得ないと同じやうに、鶏はまた卵から生まれるがゆえに、卵を離れて、卵を前提せずしては、鶏の存在はあり得ない。だから苟くも鶏なり卵なりが存在するといふ以上、卵から生まれ且つ卵を生むものとしての鶏が存在するのであり、二つのものは鶏の生存といふ一個の統一的事實の構成分として同時に與へられてゐるのである。だから卵から離れて鶏を、鶏から離れて卵を觀念するといふことは、形而上學的な考方であり、従つて鶏が最初に出來たか、卵が最初に出來たかなどいふ問題は實は、問題自體として誤謬なのである。

これを當面の問題について見るも同じことである。ただ個々の商品としてでなく、最も抽象的な範疇としての商品は、商品生産が『最も豊富なる具體的發展』を遂げた社會においてのみ、始めて『實際的に眞實』なものとして存在するのである。『資本家的生産の基礎においてのみ、商品たることが生産物の一般的形態となり、そして資本家的生産が發展すればするほど、生産物はまた益々多く商品の姿で成分として生産過程に入り込むやうになる。資本家的生産から出てくる商品は、資本家的生産のエLEMENTとして其れから出發されるところの商品とは異なる。吾々に與へられてゐるものは、もはや個々の商品、個々の生産物ではない。個々の商品、個々の生産物は、ただ現實に生産物として現はれるのみならず、また商品として現はれ、ただに全生産の現實的な部

分として現はれるのみならず、また全生産の概念的な部分とし現はれる。個々の商品が『もはや個々の商品ではなく』、『全生産の觀念的な部分として現はれる』やうになつて、始めて最も抽象的な範疇としての商品が生まれる。だから最も抽象的な範疇としての商品または商品交換は、既に十分な發展を遂げた資本家的社會といふ『具體的の生ける全體の抽象的・一面的關係として以外には、決して存在し得ないものである』。アリストテレスの時代にも、個々の商品は存在し、個々の商品交換は行はれてゐた。けれども彼れの生存したる社會は、『商品形態が勞働生産物の一般的形態であり、従つて商品所有者としての人間相互の關係が支配的な社會關係である』といふが如き社會ではなかつた。従つて最も抽象的な範疇としての商品は、彼れの時代、彼れの社會には、また現實的に存在し得なかつたのである。これ彼れの方の美を以てするも、なほ、商品價值の實體が何であるかを、遂に看取し得るに至らざりし所以である。Das Genie des Aristoteles glänzt gerade darin, dass er im Wertausdruck der Waren ein Gleichheitsverhältnis entdeckt. Nur die historische Schranke der Gesellschaft, worin er lebte, verhindert ihn herauszufinden, worin denn in Wahrheit dies Gleichheitsverhältnis besteht, しかるに『商品たることが生産物の一般的形態となる』やうな資本家的社會がすでに成立するならば、そこでは有らぬ種類の勞働生産物の全面的讓渡が事實において行はれるのだから、個々の商品は、それが如何なる種類のものであつても、

- 5) Theorien über den Mehrwert. IV., S.130.
6) Kritik der politischen Oekonomie, S.XXXVI.
7) Das Kapital, I., (Volksausgabe), S.25,26.

社會全體の富を代表するものとしての資格において現はれる。個々の商品を寄せ集めたものが社會全體の富となるといふばかりではない、個々の商品は社會全體の富を構成してゐる分子の如何なるもの、交換されうることにおいて、その各々が社會全體の富を代表する資格を有つものとなるのである。その意味において、それは「ただに全生産の現實的な部分として現はれるのみならず、また全生産の觀念的な部分として現はれる」のである。言ひ換ふれば、個々の商品には貨幣が潜在してゐる。その各々は *An sich des Geldes* である。かゝる事實が、資本家的社會においては、直接的なもの (*Unmittelbares*) として與へられてゐる。媒介されたものが同時に直接的なものとして現はれてゐるのである。かくて *der Begriff der menschlichen Gleichheit* (人間の労働の同質性に關する概念) は、すでに *die Festigkeit eines Volksvorurteils* (國民的信念の固定性) を有つもの (*マルクス*) となり、*ein unmittelbares, schlechthin anfangendes Wissen, ein Glauben* (直接的な・全く端初的な一つの知識、一つの信仰) または *das eigentliche unmittelbare Wissen* (本來的な直接的な知識——ヘーゲル) となる。そして資本論は、かゝる直接的な知識をその出發點となすものである。

かくて吾々は次のことを知る。——資本論の出發點は、その終結點に位する具體物の抽象的、一面的關係に外ならぬといふ點においては、終結點に依存し、そこから派生したものに相違ない

8) a. a. O. S.25.

9) Wissenschaft der Logik, S.52,53.

けれども、しかし終結點に位する具體物が、現實において直接的に與へられてゐると同じやうに、出發點となる最も抽象的なものも、現實的に具體物の一面的關係として、直接的にそこに與へられてゐるといふ點においては、出發點は少しも終結點に依存しないのである。吾々は、思惟をもつて鶏を分析することにより卵を発見するのではなく、むしろ最初から鶏と卵とを與へられたものとして受取るのであるが、それと同じやうに、最も具體的な終結點と最も抽象的な出發點とが、ともに直接的なものとして、從つて抽象的なものは具體的なもの、一面として、現實的に現はるゝことにより、最初から吾々のために與へられてゐるのである。二つながら直接に與へられてゐるといふ點においては、二つながら他に依存するものではない。

抽象から具體へ向上する思惟の道程は、言はば具體物を分析するために、一枚づつ具體物の皮を剥ぐやうなものである。この場合、最も抽象的な最も普遍的な範疇として最初に現はるゝものは、全體に行き亘つてゐる一枚の表皮の如きものである。それは最も抽象的ではあるが、しかし具體物そのものゝ表皮として、具體物と共に與へられてゐるのである。それは思惟の產物ではなく、歴史の產物として、吾々の眼前に與へられてゐる經驗的な一の現象である。

出發點と終結點との間における相互の依存は、ただ次の關係において起る。

出發點となれる最も抽象的な範疇は、すでに述べたる如く、終結點に位せる具體物の抽象的、一面的關係に外ならぬといふ點において、終結點に依存する。それは終結點から出發してゐる。それは最も具體的なもの、成立を待つて始めて成立する。もちろん最も抽象的な範疇（例へば商品）は、正にそれが抽象的であるといふゆえを以て、多かれ少かれ、あらゆる社會諸形態に遡る。商品は、貨幣、資本等のより具體的なものが成立する以前から既に存在してゐたのであり、商品そのものの發生は、六、七千年前の古代共產體の境目における剩餘生産物の交換にまで遡ることが出来る。だが、かゝる商品は、資本論の冒頭に出てゐる最も抽象的な範疇としての商品と、本質的に異なる。古代共產體の境目に現はれた商品は、獨立の生物としての單細胞動物の如きものである。それはそれ自身に存在する。商品のより具體的な規定を受けたものとしての貨幣、資本等の存在を前提としない。これと異り、資本論の冒頭に出てゐる最も抽象的な範疇としての商品は、高等動物の卵細胞の如きものである。それは已に高度の發展を遂げた・従つて極めて複雑な規定を有する・一定の高等動物の成熟體を前提とする。それは外見上如何に單細胞動物に類似してゐやうとも、全くその本質を異にする。それは高等動物の成熟體から生まれたものであり、かゝる成熟體をその出發點とする。しかるに、かの單細胞動物は、生物の進化過程の出發點に横たはる。それは高等動物を出發點とするのでなく、高等動物がそれを出發點とするのであ

る。それは恰も、商品生産の極度なる發展を遂げた今日の資本家的社會が、歴史的には、古代共產體の境目に發生した剩餘生産物の交換を、その出發點となすが如くである。しかるに資本論の端初となる商品は、資本家的社會の卵細胞であり、それは資本家的社會の複雑極まれる諸關係のうちから抽象されたところの、最も基礎的な・最も大量的な・最も日常的な・最も簡單な一面的關係に外ならぬのであるから、それは資本家的社會を前提せずしては決して存在し得ない。その意味において、それは現代社會——發展過程の最後の結果——を出發點としてゐる。Das Nachdenken über die Formen des menschlichen Lebens, also auch ihre wissenschaftliche Analyse, schlägt überhaupt einen der wirklichen Entwicklung entgegengesetzten Weg ein. Es beginnt post festum und daher mit den fertigen Resultaten des Entwicklungsprozesses. (人類生活の諸形態に關する考察、從つてまたそれらの科學的分析は、總じて現實的な發展と逆な道を進む。それは後方から、從つて發展過程の既成の諸結果を以て、始まる。)¹⁰⁾

だが、出發點が終結點を出發點とするといふのは、思惟の出發點が終結點を現實的な出發點とするといふ意味である。『發展過程の既成の諸結果』から成る具體物(この場合、資本家的社會)自體を思惟の出發點となし、かゝる具體物——それは『混沌たる表象』として吾々の頭腦に浮ぶ——自體の上に思惟の加工を施し、かゝる思惟の作用をもつて次第にそれを簡單な範疇に分析し、か

くして最も抽象的な範疇（この場合、商品）に到達したるのち、改めてその最も抽象的な範疇を出発點と立て、そこから再び後方への旅をなすといふが如き方法、——かゝる方法がそこに行はれるといふのではない。もし斯かる方法が行はれるのであるならば、最も抽象的な範疇が思惟の出発點となるのではなく、最も具體的なもの自體がその本來の出発點となる。しかるに斯かる具體的なものは複雑極まる諸規定の綜合であるから、これをそのまゝ思惟の對象となすならば、吾々はただ若干の抽象的一般的關係を授け出すに終るだけであらう。『人口は、例へば、それを構成してゐる諸階級を除外すれば、一の抽象である。これらの諸階級もまた、その基礎をなす諸要素、例へば賃労働、資本、等々が知らなければならない、一の空語である。更に賃労働、資本、等々は、交換、分業、價格、等々をその前提とする。……そこで吾々が人口を以て始めるとすれば、それは全體に對する一個の混沌たる表象であるだらう』¹¹⁾ かゝる思惟の道程を進むならば、『完全なる表象が蒸發されて抽象的な諸規定となり』¹²⁾ するだけであり、それら諸規定の内的聯絡は茫漠として把握され得ない。だから吾々は、最も抽象的な範疇から具體的なものへ向上する方法を探らねばならぬのであるが、その場合に、吾々にとつて決定的に重要なことは、その最も抽象的な範疇を、思惟の媒介によらず、觀察によつて直接に獲得することである。もしこれを思惟によつて求むるならば、思惟の出発點を思惟に依存せしむることになり、そこに思惟における循環

が成り立つ。そして、思惟を思惟に依存せしむる當然の結果は、その出發點を假說的・暫定的のものたらしめ、従つて研究の地盤をふらぐものたらしめる。かく、der Gedanke, dass die Philosophie nur mit einem phypothetischen und problematischen Wahren anfangen, und das Philosophieren daher zuerst nur ein Suchen sein könne (哲學、ただ一の假說的な暫定的な眞理を以て端初とするものであり、従つて哲學的考究は最初にはただ一の探求に過ぎない、といふ考)¹²⁾が起るのである。だが既に述べたやうに、マルクス的方法において、出發點が終結點を出發點とするといふのは、思惟の出發點が終結點を現實的な出發點とするといふ意味である。詳しくいへば、思惟の出發點として役立つべき最も抽象的な範疇を、分析の對象たる——すなはち思惟の對象として前提され、従つてあらゆる思惟の前に置かれたる——具體物そのもの、一面的關係として、具體物、具體の上に直接的なものとして見出す點に、端初の唯物辯證法的決定の特色が存するのである。だからそこには、出發點が終結點を出發點とするといふ意味においてこそ一の循環が存するが、しかしそれは、思惟の出發點が終結點を現實的な出發點とするに過ぎないのであるから、思惟における循環がそこに存在するのではない。それゆえにまた、一時假定されたもの、暫定的に前提されたもの、何程か任意的なものが、研究の端初となるのでは決してない。Weder ist jener Anfang etwas Willkürlicher und nur einstweilen Angenommenes, noch ein als willkürlich

Erscheinendes und bittweise Vorausgesetzt, von dem sich aber doch in der Folge zeige, dass man recht daran getan habe, es zum Anfange zu machen.¹³⁾

他方において、終結點はまた出發點に依存する。ただし吾々の思惟は、最も抽象的な範疇から出發し、次第により具體的なものに向上し、最後に、思惟の出發點がその現實的な出發點となしたる具體物を精神的に再生産するのであるから、かゝる思惟の運動からいへば、具體物はその終末の結果である。Nach dieser Rücksicht ist das Erste ebensosehr der Grund, und das Letzte ein Abgeleitetes. 先きに述べたる關係においては、始點が終點を地盤としてそこから派生したのであるが、茲に述ぶる關係からいへば、逆に終點が始點を根據としてそこから派生するものである。思惟の道程においては、より具體的なものは、出發點たりし最も抽象的な範疇の具體化として現はれる。商品に次いで現はれる貨幣は、貨幣商品(Geldware)であり、貨幣に次いで現はれる資本は、商品資本(Warenkapital)または貨幣資本(Geldkapital)等々である。従つて出發點たりしものは、それに引續く總ての發展のうちに包容せらるゝところの基礎として、より具體的なものゝ一契機として、つねに残存する。So ist der Anfang der Philosophie die in allen folgenden Entwicklungen gegenwärtige und sich erhaltende Grundlage, das seinen weitem Bestimmungen durchaus

13) a. a. O. S. 57.

immanent Bleibende.¹⁴⁾ けれども、この場合に現はるゝ終點の始點への依存は、前に述べたる始點の終點への依存と逆に、現實におけるそれとなく、思惟におけるそれである。だから最も抽象的な範疇から具體物へ向上する思惟の過程は、決して具體物そのものゝ發展過程ではない。ヘーゲルの辯證法の神秘化は、この二つを同一視することから生まれる。Hegel getiet auf die Illusion, das Reale als Resultat des sich in sich zusammenfassenden, in sich vertiefenden und aus sich selbst sich bewegenden Denkens zu fassen, während die Methode, vom Abstraktion zum Konkreten aufzusteigen, nur die Art für das Denken ist, sich das Konkrete anzuzeigen, es als ein Konkretes geistig zu reproduzieren. Keineswegs aber ist es der Entstehungsprozess des Konkreten selbst.¹⁵⁾ 『抽象から具體に向上する方法は、ただ、具體物を占有するための、即ちそれを一の具體的なものとして精神的に再生産するための、思惟にとつての様式にすぎない。それは決して具體物そのものゝ成立過程ではない』。かくて最も抽象的な範疇は、終結點のために思惟の出發點となるが、しかし決して現實的の出發點ではない。それゆえ、最も抽象的な範疇から出發して、思惟の道程の最後において、具體物の再生産に歸着することは、根源的なものへの復歸であると同時に、また單なる復歸ではない。思惟以前に現はれたる具體物は、直接的なものとしての一の混沌たる表象にすぎないが、思惟の產物として生ずる具體物は、多くの諸規定の總括・多様の統一としての

14) a. a. O. S56.

15) Kritik d. p. O. S.XXXVI.

媒介性において現はれる。思惟の本源の出發點は同時にその窮極的歸着點であるけれども、出發點にあつては直接性において現はれ、歸着點にあつては媒介性において現はれる。そこには一種の循環が存するが、しかしそれは螺旋形を描くことにより、單なる思惟の循環から脱出する。

これを要するに、抽象的なものは具體的なものを現實的な出發點とすると同時に、これを思惟の出發點となすことなく、また具體的なものは抽象的なものを思惟の出發點とすると同時に、これを現實的な出發點となすことなく、かくて出發點は終結點から派生し、同時に終結點はまた出發點から派生するに拘らず、そこには思惟における循環からの完全なる脱出がある。唯物辯證法は端初と終結とを此の如くにして辯證法的統一に齎らすものであり、そしてその最も鮮かなる實例は、吾々がこれを資本論において看取し得るところのものである。